

# ミルトンの「ソネット・19番」

——解釈と創作年について——

原 田 純

## I

英文学入門の材料にも使われる程に有名で一般的となっているこのソネットは E. M. ティリヤードによって「極めて難しく、不思議な詩」と呼ばれ<sup>(1)</sup>、過去40年間さまざまな議論が繰り返されて来た。最近では H. ロビンズが J. H. ハンフォードの側に立ってこの詩の創作年を 1655 年と断じ<sup>(2)</sup>、ミルトンはこの詩において失明の打撃から立直り、叙事詩制作の自信を得た歓喜を表明したのであるとした。これに対し、F. パイルは伝統的な解釈を支持して、ミルトンの苦悩とそれを超克した諦観を示すものであると主張し、創作年を1653年後期か1654年初期と推定した<sup>(3)</sup>。ついで A. ゴスマンと G. ワイティングはパイルを批判し、詩はミルトンが諦観に到る前のディレンマ状態で書かれたものであるとし、創作年を失明直後の1652年とした<sup>(4)</sup>。

ソネットをめぐる論争は現在のところ上述の歓喜・1655年説、諦観・1653・4年説、及びディレンマ・1652年初期説の三つに代表されている。我々はこれを検討し、もう一つの考え、即ち苦悩・1652年後期を問題にしたいと思う。

## II

このソネットを理解するには作品自体の解釈と共にミルトンにおける失明の苦悩の特質、肉体的な失明現象に対する彼の17世紀的の反応が考察される必要がある。

先ず冒頭6行における失明の苦悩は一般的な肉体的苦痛、精神的恐怖の表出

であるよりピューリタン詩人に特有な質を示している。彼にとって失明とは幼少よりひたすらそれを目指して励んで来た「国民にとって信条となる作品」創作の必須条件——my light——が無くなった事を意味する。M. ニコルソンはミルトンが目指した詩の質から考えて彼が感情の自然な流露であるような詩人や単なる古典派詩人よりも並外れた程度で自分の眼に頼る必要があったと指摘している<sup>(5)</sup>。我々はミルトンにおける個人的な理由からする失明の恐怖を彼のこのような使命感の側から理解出来る。ロビンズは歓喜説を押し進める為に、八行連句が絶望の調べを与えるとすれば、それは「一時的で本質的な意味を持たない (transient and uncharacteristic) 感情を記録したものである」と云う<sup>(6)</sup>。成程今日我々はこのソネットと並んでミルトンの文字通り歓喜の書「第二弁護書」, 「自らの為の弁明」及び「失樂園」を持ち、ミルトンが失明の危機を超えて、その受難を神の摂理として歓喜した事を知っている。しかし完全失明時点にいたミルトンにとって盲目という事実は全存在のかかる事態であってこれを「一時的で本質的な意味を持たない感情」と断ずるのはこの時点を生存の全内容として苦悩した事によってのみ「第二弁護書」の心境が生まれた意義を見落していると云えよう。我々はミルトンのかかる心的成長の理解の為にも“my light is spent, / Ere half my days”の行を支えるリアリティをこのソネットの本質的な意味、作者が全存在をかけた危機感として受取るべきであろう。

ピューリタン詩人に対する失明の衝撃はこの行に続く一タラントの譬話の行において更に深刻となる。この行を含む1~6行と「リンドス」70~76行は苦闘した勉学の効もなく志半ばで外からの絶対的な暴力によって断ち切られてしまった詩人の運命の悲痛を訴えるという点においてテーマの照応が見られる。しかしここで注意すべきはかかるテーマ上の照応よりも前者は‘one Talent’と‘God’, 後者は‘Fame’と‘blind Fury’に代表される発想上の差である。後者の悲痛さは現世的なレベルにおいて‘the fair Guerdon’を失う故であるのに対し、前者は‘My true account’を造り主に見せる事が出来ない悲しみである。ソネットの1~6行はルネサンス的な現実主義に鋭く対立して現実を来世至福の準

備段階と見做すピューリタニズムに発想の基盤を置いている。ミルトンにあっては失明はキリスト教の神との関係において探られ、有意味化されている。タラントの譬話の使用は単なるレトリックではなく、詩の組織となっている。「リンダス」では ‘blind Fury’ が死をもたらすが、ソネットではこのような意味での動作因は不明となっている。語法上からも “When I consider how my light is spent,” は動作主を想定させる受動態と考えるより<sup>(7)</sup>, ‘is now gone’ というように完了結果ととる方が妥当である<sup>(8)</sup>。なぜならこの考え方はミルトンの側における自分に失明をもたらした動作因の不可解さ、無情な必然への恐怖感を説明するからである。事実彼は我々が今日病理学的原因以外に何ら運命的、超驗的な必然を認めない眼病（この場合はそこひ）に対して因果応報観の論理の中で苦悩し、その枠の中において自分の災難を処理しようとする。先ず blind についてみると<sup>(9)</sup>, マタイ伝では blind が17回出て来る中で、10回は “Woe unto you, ye blind guide” (23:16) の如くひゆ的な意味で使われ、かかる blind は hardening や hardened の意味を持ち、ギリシャ語 πώρωσις を起源にしている<sup>(10)</sup>。即ち πωρόω (to petrify) から出ている。それ故 blind である事は the hardening of the heart である事を意味する。「リンダス」における異教の神は ‘blind Fury’ であり、同詩119行の ‘Blind mouths’ は J. ラスキンの云う如く文字通りキリスト教聖職者と正反対の意味を持つメタファである。失明の徴候のなかった「リンダス」制作当時の blind のひゆ的な使い方は失明以後慎重となり、blind は肉眼の見えないもの、心の眼の見えないものは hardening と区別して使うようになっており、この顕著な例は邪悪なデリラは後者、サムソンは前者である<sup>(11)</sup>。ミルトンが blind の語のひゆ的な使用に慎重になった事実はこの語によって自分が呼ばれる事の堪え難さ、コムプレックスを体験した時期があった事を想定させるのである。幼少より使命感に生き続けて来たピューリタン・ミルトンであるだけに、blind が内包する hardening of the heart の響きはどんなに苦痛であったかと考えられる。ソネット冒頭四行の脚韻 spent, wide, hide, bent における齒

茎破裂音の重なりによる効果にもその苦悩を覗う事が出来る。又 wide にストレスが置かれる事の荒りよう感、‘dārċ wórld ańd wíde’ と軟口蓋摩擦音の頭声法は先の四行脚韻の重苦しさに恐怖感を絡ませる。詩はこうして blind になるはずのない自分が失明し、心なき政敵の嘲笑を浴びる運命に対しての悲痛な疑惑——自分と神との関係について危険な極限(7行目)にまで自分を引きずって行く。タラントの譬話はこのような自分と神についてのつきつめた危機のモチーフを導入する役目をしている。パイルによればこの譬話は神の恩寵にはそれに見合う行為によって報ゆるべしという商人的関係、眼には眼をという旧約的世界観を示すものであり、失明以前のミルトンの世界観の集約であって、これは失明を機にあとに続く六行連句の新約的絶対他律の世界観に移行すべきものであると考えられている。ゴスマンとワイティングはパイルの字義的解釈を批判し、神の限りない恩寵を示すものであるとして英国国教派の比喩的解釈をとった<sup>(12)</sup>。共和国建設の革命運動に参加したピューリタン達がマタイ伝25章を商人的関係で理解しそれを実践していた事は R. H. トーニーによって立証されている<sup>(13)</sup>。ミルトンがこれらの人々の代表的イデオログであり、彼自身聖書解釈はアレゴリカルな読み方を避け、字義的解釈を優先させている事実から見て、伝統的、権威的な側の比喩解釈より、現世の奮闘の量によって、神の恩寵に報い、来世の祝福を期待するというパイルの解釈の方が妥当である。なぜなら失明によって仕事が出来なくなったミルトンの焦燥、絶望をこの解釈は正しく把む事が出来る。タラントの譬話をこのように17世紀の一般的なコンテクストの中で理解すると同時に、ミルトンという特殊なコンテクストの中で理解する必要がある。譬話では下僕は自分の意志から一タラントを土に埋め、その結果神の怒りに触れるが故に、その責めは当然自分に返る。ミルトンでは失明は自分の意志、判断に関係のない所から来たのであり、且つ彼からすれば神に仕える仕事——クロムウェル政府のラテン語秘書官の激務——の結果である。それ故聖書の譬話が自分を律する事がどうしても判らなかつたと思われる。ここに“Doth God exact day-labour, light denied” という危険なつぶやきが吐か

れる必然がミルトンの中に生まれてくるのである。妻パウエルが勝手に里に戻ってしまった時にも彼は義に生きる自分が何故かかる目に会わなければならぬかと歎じた。彼の悲劇は大義に生きる誇り高い自分が現実の側から思いもよらない挑戦に出合い、大義の論理を引裂かれ、大義への疑惑と苦悩の危機に追込まれる所にあり、彼が大義に誠実であろうとすればする程、現実がこっぴどく復讐するのである<sup>(14)</sup>。かかる悲劇において失明は彼の生涯にとって致命的な意味をもったものの一つと考えられる。当時すでに盲人ミルトンを嘲笑する冊子は5種類に及び、最後に最も悪罵に充ちた匿名の書「王の血は天に向って叫ぶ」(1652年8月)が出された。失明に加えて病氣、それに妻と一人息子の相次ぐ死という事態の中で、さすが剛直の彼もこれらの書物に対して反駁する気力がなかった。その当時の心境を「自己の為の弁明」は伝えている<sup>(15)</sup>。この期間、彼は3篇のソネットと旧約詩篇1~8までの訳以外筆を絶っている。英国民の歴史」も「キリスト教教理」も中断されている。彼が‘dark world and wide’の中で発した“Doth God exact day-labour, light denied”はかかる具体的な場において受け止めらるべきである。この一句はソネット中最も激烈に我々の心を打つ。それは直ちに“I fondly ask”と訂正されるが、たとえ一瞬でも上の句に覗き得るような神への疑惑が彼の心をよぎった事は重大である。現実の不可解な暴力に対して信仰人が遂に叫び得る言葉としてこれは余りに哀しい誠実さに輝いている一句であり、我々はこれを十字架上のキリストの言葉“Eli, Eli, la'ma sa-bach-tha'ni?”「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マタイ伝27:46)の理解の延長線上に置く事が出来よう。ミルトンはこの危機をやがて「第二弁護書」更に「失樂園」第三巻及び「サムソン・アゴニステス」を書きあげる事によって見事に克服する。しかしその際注目すべきは自分の失明の原因を神の摂理という論理によって正当化している事である。「第二弁護書」において彼は旧・新約聖書は勿論、古今東西の古典より盲目の義人の例証をあげる。その論証の激しさ、詳しさは今日の我々には奇異、過剰に思われるのであって、我々に彼が失明をオブセッションと

して持っていた時期があった事を想定させる。失明は神の怒り、当然の罰であるとする論敵に対して、否、神の摂理なりと開き直る彼は、その基本的発想において論敵と同様、経験事実とは別の論理に従っているのである。我々はここで17世紀の特殊性、前近代から近代への過渡期という状況を考慮すべきである。経験科学の教える客観的論理が神中心の因果応報観の枠を突き出ようとする時代。保守派のダンでさえ自分の魂の不気味な動揺に気付いていたのであり、ヒューマニズムの教養を人一倍身につけ、自然科学の諸発見に敏感であったミルトンが世界観の問題では当時の唯物論者ホッブズと相通ずるものがあったのも不思議ではない。それ故我々は政敵の中世的な方向からなされた悪罵嘲笑を、ミルトンが経験的、客観的な見地から無視する事は可能であったのではなかろうかと考える。しかしながらミルトンの近代性は自己の致命的な危機にあって遂に彼を支えるものにはなっていない。かって「アレオパジチカ」で力説した理性も近代科学の論理に従うものではなく、古い因果応報観の枠内で働くものであったのである。失明に対する異常なまでの自己弁明はこれをはっきり語っている。彼は云う。「それから私は自らについて、正確にこれまでの行いを調べてみたし、自分の魂を検討してみた。しかし自分はこれまでどんな時期においても、およそかかる災難を招くような悪事を犯した覚えはない。神よ、この事を照覧あれ」<sup>(16)</sup>。この考えは近代のものではなく、中世的な「存在の大きいなる鎖」が未だきつい事を物語っている<sup>(17)</sup>。神をすべての動作因とする世界観から自由でない限り、失明にまつわる忌まわしい因果応報的な罪悪感から完全に自由にはならないのである。しかも彼の場合失明の原因が論敵や常識が考えているような悪事ではなく、「第二弁護書」で繰り返される如く神の栄光への奉仕であったが故に、その矛盾は更に痛烈に彼を苦しめたと考えられる。この苦闘はやがてティリヤードが見事に説明し得た認識へとミルトンを導いてゆく。即ち「現実には人間の中に訳の判らない矛盾したものがあって、それは人間が絶対に失敗する必然がないのに、失敗させてしまうものである」<sup>(18)</sup>。この認識——人間は個人としては原因を作らないのに不可避免的に起る災難、しかもこれに対

して人間は責任を負わされている。これこそ信仰人ミルトンが現実との否応ない苦闘によって学び得た一つの真実であった。これがその後の彼の発展に重大な契機となった事は疑い得ない。彼が「一国民の信条」となるべき作品よりも「神の道を人々に証す」詩の創作に転じ、その中で扱った中心課題即ち原罪と墮落の大災難はやはり厳密な意味で「不可避的」に起ってくる<sup>(19)</sup>。失明によるミルトンの17世紀的苦悩は創世記神話にリアリティを与えたのであり、「失樂園」の主要なテーマ——神の予知と人間意志——形成の原形質的な役割を有していると云えよう。

### Ⅲ

しかしながらソネット解釈及び創作年推定に関して大切な事はこの認識を生み出す機縁となった苦悩の時期とそれがミルトンに自覚的に認識された時期とを混同しない事である。彼が“Doth God exact…”を発した時期は彼の中で神と自分との関係が解体するかも知れない危機であった。「キリスト教教理」で「このような疑惑には信心深い人々でさえ時として陥る事がある、たとえしばらくの間としても」<sup>(20)</sup>と言っているのはこの時期を強烈な体験として持っているからであろう。ミルトンは疑惑から絶望へと破滅して行かなかった。神に疑惑を発する自分を‘fondly’と判断する眼が開いていたのである。fondlyの解釈について、ロビンズはミルトンはすでに内なる光に照らされていたから質問自体が fondly になるとし<sup>(21)</sup>、パイルは旧約的発想からする神に対する詰問はこの上なく不遜であり、それが判ったが故に fondly としたのだとする<sup>(22)</sup>。パイルは失明を機に旧約的信仰から新約的信仰に移行したとするけれども、ミルトンがこの苦悩の中で先ず始めたのは旧約詩篇の訳であり、又“Avenger, O Lord…”に始まる極めて報復的なソネット(1655年)を発表している事などからみても、このソネット創作時においてミルトンが fondly を新約的な立場への移行的自覚において使用したとする事は難点があろう。“light denied, /I fondly ask; But patience to prevent”とコンマだけで続き、事実上の六

行連句が八行連句の終行の真中からセミ・コロンで始まる事は思考、感情がパイル的な認識判断の余地のない厳しさを示している。重要な事は信仰移行云々のレベルよりやがてかかる移行を自覚的に決定的なものにする信仰それ自体の危機をこのソネットが告白している事である。その事の重大さに自らの発言を直ちに *fondly* と規制しなければならなかったのである。デイチスが句読法にソネットの「複雑な動き」<sup>(23)</sup> を感得したのも、ティリヤードがこのソネットを「極めて難しく不思議な詩」と感じとったのも、ミルトンのかかる自己露呈の異常な面を感じたからであろう。*fondly* という一語はミルトンが絶望へと破滅しない為に神に詰問する自分を律するという全存在のかかったぎりぎりの直感判断の表出であり、パイルの言うような教理的、認識的な判断のレベルで説明されるべきものではない。

ソネットではこのあと *patience* が現われて、神疑惑の不逞な ‘I’ を六行連句から消してゆく。*patience* の一語は詩構成上八行連句と六行連句を結びつける位置を占め、疑惑と苦悩の故に激発、破滅せんとする自分を制し、災難への忍従、そして平安へと導く契機役目をしている。ここには「汝等の耐える力によって、汝等は自分の命を得るであろう」(ルカ伝 21:19) という救いの言葉が背後にあったのであろう。信仰が疑惑の火で灼かれ、理性が因果応報の鎖につながれている時、即ちミルトンが生身の人間として、人間的な苦悩の最中にある時、自らを救い得る道は耐えている以外にない。詰問する自己に答える主語が神や霊や信仰ではなく、実に *patience* という人倫的な一語である事は注目すべきである。以下ソネットの六行連句の解釈に入る。注意すべきは *patience* が主語となって、‘I’ に働きかける形をとっている事である。主人公が忍耐する形式をとらず又神が主人公に忍耐を課する形になっていない事である。即ち忍耐が擬人化され、主人公とドラマチックな関係にある事である。ミルトンが余程の場合しかアレゴリを採用しない事から見て、かかる形式をとったのは彼の側に余程の理由があったと見るべきであろう。ロビンズは14行目の ‘They’ を最高天使群と見、ミルトンをその中の一人とする事によって歎喜



説をたてた<sup>(24)</sup>。彼はトマス・アクィナスの天使論をここに適用したのであり、patience の登場に注意をしていない。パイルはこの点 patience に注目し、八行連句のむき出しの自己を隠す非個性の衣であるとして読みの深さを示している。彼によれば patience は具体的可能的な心的内容として機能し、従順を促し、疑惑を静め、信仰と希望を徐々に培ってゆくと言う<sup>(25)</sup>。ゴスマンとワイティングも「明らかに彼（ミルトン）は忍耐の忠告に留意しようと願っている」<sup>(26)</sup> とするが、パイル程積極的な意義を patience に与えていない。注意すべきはソネット前半における主人公の自己露呈の直情性が、後半 patience が主人公に語るという対話形式となる事によって、即ち神をなじる孤絶した己れが対話者を持つことによって、‘this dark world and wide’ という閉ざされた無方向の場から、伝達関係を獲得する開かれた世界へと方向づけられた事である。これは対話形式の一つの意義であるが、ソネット内ではかかる形式への転換が行なわれなければならなかったのは、不遜な問を発する事をこれ以上許すなら、その激情の故にソネットの抒情表現の形式が壊れる故であったと考えられる。荒れ狂う疑惑、苦悩、怒りの感情——“Doth God exact...”——の直情性がこれ以上激発すれば抒情表現の形式では処理する事は出来ないのである。それ故 fondly と規制し、patience が直ちに來た事は、ミルトンの激情がそれによって鎮まった事を示しているより、作者の側からすれば自分の感情は抒情的に処理されるには余りに激しいものである事を認めたからに外ならず、所謂 ‘objective correlative’ を抒情的な仕方で見出す事が出来なかったとも云えよう。故に対話形式をとったのは作者の側からすれば自分が激情から破滅へと落ちていけない主体的な要請であり、ソネットの側からは感情と表現との関係が壊れてしまわない為の芸術的な要請があったと云えよう。それ故この対話形式は主人公が未だ失明の苦悩と闘っている最中である事、未だ和解が済んでいない事を示しており、この苦悩はソネット冒頭2行が伝える直接的な苦悩と同質のものである事に注意しなければならない。ソネットは形式において前半と後半では転換があってもそのモチーフである苦悩は終始貫ぬかれており、失明との

闘いというテーマは最後まで一貫しているのである。パイルは非個性化というすぐれた意見を出しながらも、旧約的世界観から新約的なものへの移行という考え方に立って、作品の前半は怒り、後半は諦観を示すとするが、このソネットにおける形式の転換はモチーフの変化を意味しない。それどころか苦悩のモチーフが形式を転換させたのであり、苦悩の主体である‘I’が *patience* の登場、その発話の地となっている事は云う迄もない。六行連句解釈において重要な事は *patience* の発話内容を‘I’の主体内容とする不注意である。‘stand and wait’ はそのままでは *patient* の意味以外何物も示さないし、‘best/Bear his mild yoke’ は諦観以外の何物でもない。しかしながらかかる言葉が百%六行連句において有効であるとする事は対話形式が許さない。‘I’は *patience* とは重ならない。ここに対話形式のすぐれた機能が働くのである。苦悩という一つのモチーフが八行連句では独白形式によって無方向な直情性の形で表出されたのに対して、ここでは‘I’のあるべき姿としての忍従という対話者によって見事な方向づけを遂げている事に注目すべきである。ソネットのような短詩型の生命は唯一つの核となる感情の純粋な表現にある。信仰移行、世界観変化という認識的な論理的手続を読み込むには余りに凝縮された直観を中核としているのである。このソネットは完全失明に伴う苦悩という唯一つの感情をモチーフに、苦悩との文字通り盲目的な闘いが（八行連句）、その苦悩の故にあるべき方向づけを遂げる（六行連句）というテーマを純粋に追求し得ている。ここにこの作品が我々に直接的な感動を与える秘密がある。ソネット内における抒情形式から対話形式への変化は苦悩感情の中断や終結ではなく、より激発するが故の内部屈折という処理であって、それ故に一層感情の激しさを思わせるのである。しかしながらこの形式が行われた事はミルトンが自己の苦悩を芸術的に客観化し得た事を示し、自分にとって矛盾でしかない不可解な失明の苦悩の故に信仰上の疑惑が生じ、理性の働きが利かなくても、芸術家としての眼は確実に開いていた事を示している。このソネットが苦悩感情という素材的なレベルで終始するなら我々は感覚的な反応しか示さないであろう。苦悩が対

象化され、芸術的な客観に高められた見事さによって我々は完結した感動を得るのである。

#### IV

W. R. パーカーはソネットが与える感情の生々しさと ‘Ere half my days’ を文字通りに考え、ミルトンの父の生存年数との比較から創作年を1651年後期とした<sup>(27)</sup>。しかし作品に出る half を数字的厳密さで扱ったり、父の生存年数を根拠にしてミルトンの my days を計算するのは手続き上無理であろう。パイルはこの詩が諦観を示しているとして、「第二弁護書」の完成の頃、1655年とした。これは D. マッソン以来の一つの伝統的な見解であり、その強みは主として23篇のソネットの年代順の配列、草稿書写の筆跡からする外的証拠を根拠と出来る所にある<sup>(28)</sup>。ゴスマンとワイティングはパイルを批判して、未だ失明の衝撃から立直っていない時期とし、失明直後、1652年初期と推定した<sup>(29)</sup>。1652年説は J. S. スマート以来のもう一つの伝統的な見解であり、私も上述のソネット解釈——苦悩の直情性とその芸術的処理——から見て、ミルトンが最大の危機にあった時期に自己の芸術的救済として、直観的に感情の浄化を行ったのだと考え、1652年をとる。1655年をとるならば我々はもう一つの失明の「ソネット22番」とこのソネットを同じ年代、同じ心情において理解しなければならなくなる。「ソネット22番」は‘I’が盲目こそがこよなき真の導きであるとして、敢然と自由の擁護という神の道を進む歓喜を歌っている。この詩における前半六行の失明の記述は過去3ヶ年という明白な規定の上で語られており、続く八行連句からはっきりと終止符で切られている。19番と22番とは解釈上かかる際だった差を示している。今、外的証拠を額面通り受取るなら、18番は1655年4月以前に書かれた筈はなく（ビーモントの殺りくは同年3月）、22番は同年9月以降に書かれた事が明らかな故に19番と22番の創作日の差は僅か5ヶ月が最大限となる。ミルトンのように体験を誠実につきつめる詩人がかかる短時日に苦悩から歓喜へと変貌したとは考えられない。彼の全生涯に亘る

創作態度から見て不可能と思われる。しかも C. J. モースの指摘からも明らかのように18番と22番の間には年代順に見て不合理な冬期の作20番がある事は、<sup>(30)</sup> ミルトンのソネット年代に関する外的証拠の信憑性は完璧でない事を示している<sup>(31)</sup>。22番の前半における失明記述の淡々とした客観性は諦観を基底としてのみ可能な様式であり、完全失明後の3ヶ年が苦悩と絶望から平安と希望へと方向づけられ、「第二弁護書」そしてこの22番への確信と歓喜への道程を辿って来た事を示している。この方向づけの契機、その道程の端緒として19番は記念碑的な意味を持つと云えよう。22番創作の3年前と云えば1652年の大体中・後期があてはまる。事実この時期こそはミルトンが「自己の為の弁明」で告白した最悪の時、即ちサルマシウス失脚の報も知らず、外では反革命派の悪罵を甘受しなければならず、内では妻メアリと一人息子ジョンの死が続いていた時であった。彼が1652年7月に亡くなった妻と子の亡骸を葬ったのは実に3ヶ月も経った10月である<sup>(32)</sup>。これは彼が「王の血は天に向って叫ぶ」の反論を共和国政府に命ぜられながら遂に筆を執る気力の無かった時期であった。この時期こそミルトンが生涯の幾多の苦難の中で肉体的、生活的、精神的に致命的な疑惑と沮喪を感じていた日夜であり、失明による苦悩がそれらの集中的表現として、全存在のかかった関係の中で、極めて17世紀的な思考脈絡において追求されていたのであろう。「ソネット19番」はこの期間の心情を伝えるものと考えられる。‘dark world ańd wide’ と dark というという肉体の苦痛より world や wide という空間的な語にストレスが置かれている事の空漠的懊悩、“Doth God exact…” と敢えて問うぎりぎりの切実さは、眼病進行と共に激しくなり、完全失明を機に一身上、生活上、社会上の諸々の敵対要素が彼の信仰に対して、又それ故に全存在に対して総攻撃をしかけて来た時期の苦悩の表現であると考えられる。patience が来るのは疑惑が絶望にならない為に、その苦悩と同じだけの偉大な忍耐が必要であったが故である。苦悩対忍耐の攻防戦は1652年中期より後期に特に激しく日夜彼の心の中で繰返されていた事であろう。この期間の感情こそソネットの中核をなすものであり、かかる己れ

に対して *patience* が何物にもまして要請されたのである。それは未だ自覚的認識として失明を神の摂理として歓喜する時点ではない。かかる到達への証拠を「第二弁護書」及び1655年の22番ソネットにおいて我々を見る事が出来る。19番はかかる道程への端緒であり、*patience* の語りかけは明らかに歓喜への道の布石的な意味を持っている。‘dark world and wide’の中で無方向に苦しみ、疑惑する小さな‘I’に対して *patience* は“his State is Kingly”と喝破して無辺際之恩寵世界を教え、“Doth God exact…”と不運なつぶやきを発する孤絶した‘I’に“‘They also serve who only stand and wide’”と語って、失明のあるがままの姿がそのまま偉大な使命であるとする啓示を行うのである。ソネットにおけるかかる芸術的救済が現実のミルトンの肉眼の失明から苦悩の激発による心の盲目を救済してゆく決定的な契機となった事は疑い得ない。ミルトンが苦闘する自分を客観化し、それをソネットという定型に定着した力、即ち芸術的直観と形象力こそは彼を失明にまつわる苦悩から立直らせた根源的な力である。苦悩対忍耐がかみ合う果てしない心の戦場にミルトンが敢行する芸術の攻撃こそ、彼の心から疑惑を除く決定的な契機となったと考えられる。ソネットはこの意味においてミルトンが自分の苦悩を超え得る機縁を掴んだ事を我々に教えてくれる。彼が失明を自分の論理の中で処理し、正当化し、神の摂理なりとする認識にやがて到達するであろう事を示すものである。事実我々は約一年半の後(1654年春)に「漲るような活力を感じさせる」<sup>(33)</sup>「第二弁護書」の完成を見、更に一年余(1655年)して失明に対して歓喜し、確信を表明する「ソネット22番」を持つ事になる。

## 註

- (1) E. M. W. Tillyard, *Milton* (Chatto & Windus, 1930; rep. ed., 1956), p. 190.
- (2) Harry F. Robins, “Milton’s First Sonnet on His Blindness,” *RES*, VII (1956), 360-366.
- (3) Fitzroy Pyle, “Milton’s First Sonnet on His Blindness,” *RES*, IX (1958),

- 376-387.
- (4) Ann Gossman & G. W. Whiting, "Milton's First Sonnet on His Blindness, with a Reply of F. Pyle," *RES*, XII (1961), 364-368.
- (5) Majorie H. Nicolson, *A Reader's Guide to John Milton* (Thames & Hudson, 1964), p. 154.
- (6) Robins, *op. cit.*, 361.
- (7) Tillyard, *op. cit.*, p. 388.
- (8) W. P. Parker, "Date of Milton's Sonnet on Blindness," *PMLA*, LXXIII (1958), 200. 尚 Le Comte はラテン語法として *Lumen extinctum est* で説明している。 *A Milton Dictionary* (London; Peter Owen, 1961), p. 309.
- (9) Cf. Strong's *Exhaustive Concordance of the Bible*.
- (10) Henry Alford's *Greek Testament* (2nd ed., 1855), I, 114; II, 408.
- (11) Cf. Mary A. N. Radzinowicz, "Eve and Delila," *Reason and the Imagination*, ed. by Joseph A. Mazzeo (Columbia U. P., 1962), pp. 144-155.
- (12) A. Gossman & G. W. Whiting, *op. cit.*, 367-368.
- (13) Cf. R. H. Tawney, *Religion and the Rise of Capitalism* (1926; rep. ed., 1964, Penguin Books), pp. 227-250, esp. pp. 246-247.
- (14) Cf. 平井正穂, 「ミルトン」 (研究社, 1958), p. 114.
- (15) Cf. D. Masson, *The Life of John Milton* (Peter Smith, 1894; rep. ed., 1946), IV, 468.
- (16) *Columbia Works*, VIII, 67.
- (17) Cf. Tillyard, *The Elizabethan World Picture* (Penguin Books, 1943; rep. ed., 1963), pp. 37-50.
- (18) Tillyard, *Milton*, p. 220.
- (19) Cf. John M. Steadman, "'Man's First Disobedience': The Causal Structure of the Fall," *JHI*, XXI (1960), 180-197.
- (20) *Columbia Works*, XVII, 59.
- (21) Robins, *op. cit.*, 365.
- (22) Pyle, *op. cit.*, 379.
- (23) D. Daiches, *Milton* (Arrow Books, 1957; rep. ed., 1963), p. 140.
- (24) Robins, *op. cit.*, 363-365.
- (25) Pyle, *op. cit.*, 380.
- (26) Gossman & Whiting, *op. cit.*, 369.
- (27) Parker, *op. cit.*, 199-200.

- (28) Cf. M. Kelley, "Milton's Later Sonnets and the Cambridge Manuscript," *MP*, LIV (1956), 20-35 及び J. T. Shawcross, "Notes on Milton's Amanuensis," *JEGP*, LVIII (1959), 29-38.
- (29) Gossman & Whiting, *op. cit.*, 366.
- (30) Cf. C. J. Morse, "The Dating of Milton's Sonnet XIX," *TLS*, Sept. 15, 1961, 620.
- (31) *Loc. cit.*
- (32) Masson, *op. cit.*, IV, 468-469.
- (33) Tillyard, *op. cit.*, p. 193.